

話題 其の28: 笑うに笑えない話

2ヶ月前、毎週金曜日の午前中に掃除に来てくれていたスリランカ人のメイドさん2人が急に帰国しました。一人は2年間の契約が終了し、もう一人は、「ご主人が大怪我をした」との連絡が入ったためです。やっと少しコミュニケーションが取れ始めた頃で、急に寂しくなったものです。

でも、先回お知らせしたように、人権無視の傾向が強い中東での辛いメイド生活から開放され、今ごろは家族の元で全身の緊張をほぐしているのでしょう。そう思うと少しは救われます。

その後、友人の紹介でフィリピン人メイドさんが週に2回来てくれています。

掃除、洗濯、アイロン掛け、時には好物のパンシット（フィリピン風焼きビーフン）まで作ってくれます。彼女はサウジアラビアで3年間、やはり同じように外出禁止の年中無休で働いた経験があります。その後、2週間だけフィリピンに帰国してヨルダンに来たそうで、幸いにも日本人夫婦が3年間雇ってくれました。

その日本人も帰国し、今は3人の日本人が週に2回づつ、毎回4時間程度の出張サービスを受けています。その他にも、彼女は、メイドを斡旋するエージェントに席を置き、新しくフィリピンやインドネシアからやってくるメイドさんを1週間教育するのだそうです。

彼女から聞いた指導体験を紹介しましょう。

『フィリピン人はすでに教育されているから殆ど手が掛からないけど、問題はインドネシア人なの。だって、言葉が全く通じないもの。そして、奥さんが買ってきたシャンプーやリンスを冷凍庫に入れて凍らせてしまうし、壁掃除の時にはコンセントに水をかけて洗うのよ。1週間後には雇用主の所で働きはじめるんだけど、いつ返されるかいつも心配ばかりしてるわ。。。。』

滑稽だけど笑えない話ですよ。

私の想像では、彼女たちは、宅急便みたいに「ドア ツー ドア」でヨルダンに出稼ぎに来たようです。貧しい家に生まれたから十分な教育を受けられなかった。だからまともな就職先もないまま苦しい家計を助ける時期が来た。誰もが嫌がるけど家族のために2年間の契約を交わしてヨルダンにやって来た。と思うのです。インドネシアの自宅を出て、教育訓練や語学教育を受ける機会など無く、多分、心の準備さえ出来ずにヨルダンの仕事場まで直行で来てしまったのでしょうか。

「東南アジアの少女売春」と同じ構造なのでしょう。中東で垣間見たアジアの貧困です。

話題 其の29: 親の背中

ヨルダンの各教育機関では学年末が終わって2ヶ半月という長〜い休みに入っています。

と言うことで、昼間にいろんな場所で子ども達に出会います。

例えば、パンク修理に立ち寄った修理工場で得意そうな顔してコンプレッサーの圧縮空気を入れてくれた10歳くらいの少年。親子ともに油まみれで、洋服の柄さえ見えない有様でした。

例えば、我が職場にある出前専門のコーヒーショップに働くスタッフの子ども。

この子は12歳くらいかな? 3階の私の部屋にたどり着いた頃にコーヒーは冷めていたけど、そしてカップにコーヒーを注ぐ仕草は不器用だけど、真剣さに感心しました。

例えば、いつも行っている散髪屋に働く従業員の息子、多分10歳くらいかな。

父が切った髪をほうきではなく、ドライヤーを手渡す。。。。すでに作業手順を理解しています。

私の少年時代も似たような環境でした。と言っても父親が町役場に勤めていて職場に行ったのは1回だけです。でも、少しばかりの畑を作っていた母親の手伝いはたまにしていました。タマネギ、ジャガイモ、サツマイモなどの苗付けから草抜き、そして収穫。

そうやって、小さいときから親の手伝いをしながら働くことを学ぶのですよね。

今の日本はどうか? 自分の子ども達に職場を見せる機会がありますか?

子ども達はどうかやって、主婦以外の労働の大変さや面白さを学ぶのでしょうか。

私も3人の子どもを持つ父親として、特に単身赴任でヨルダンに住んでいて。。。。反省、反省。

子どもを勤務時間中に職場に連れてくるなんて、NHKが企画でもしない限り難しいのが日本の常識ですよ。この日本人には常識破れだけど、ヨルダンでは常識でまかり通る『子育て』、そしてそれを受入れてしまう大人社会が大らかでいいですよ。

帰国したら子どもに職場を見せて、「ここでお父さんは〇〇してるんだぞ」って語りかけてみたいですね。そして、同僚達からあめ玉の1個も貰えらるともっと良い仕事環境が出来そうな気がするのですが。。。。その前に帰国後の職場って何処?
